

# 教育の流れを変えた偉大な指導者

佐々友房



正倫理  
廉恥  
進文明

明治二十年一月、時の文部大臣、森有礼は九州巡視の折、熊本に立ち寄った。県内の主だった学校を視察するのが目的である。まず、森ら一行は熊本中学（現在の県立熊本高校の前身・熊本中学とは別に立ち寄ったが、授業を参観するやいなやアツイと出て行ってしまった。また、隣の熊本師範学校ではいきなり、生徒に駆け足を命じ、生徒たちがアゴを出すと「もうよい」と帰ってしまった。さらに、熊本医学校では、玄関に落書きを見つけ、「いやしくも玄関は、人というなら顔である。顔に落書きするような学校を見る必要はない」と怒鳴り、そのまま引き揚げた。「なんて気むずかしい方なんだろう…」各校の職員達は、ただ呆気にとられるばかりだ。

そして、森ら一行が最後に立ち寄ったのが、佐々友房が開いた私立・済々黌である。ここでは、体育を見せたあと、二年生の英語授業に案内した。校内にあふれる活気。そして教師と生徒

との連体感に森は目を見張った。帰京後、森は全国知事会議の席上で「自分は全国を回った皆さんの学校を視察し、いつも失望していた。しかし、今度、熊本の済々黌を参観し、その質実剛健の教育に接して、はじめて学校らしい学校を見たと思った。」と絶賛した。そして、前年東京に作ったばかりの第一高等学校に、済々黌式の教育法を導入。佐々と縁の深い古荘嘉門を校長に迎えたのははじめ、首脳陣を済々黌関係者で固めた。

こうして、佐々友房と済々黌の名は全国に響き渡っていく。済々黌の教育は全国中等教育の範とされ、その校風を慕って、遠く東京、青森、宮城などからも入学希望者が集まるようになっていった。

## 人づくりで国家を変革

明治十二年一月、佐々友房は約二年ぶりに故郷の土を踏んだ。武力による国家の変革を信じる彼は、明治十年に

西南戦争が勃発すると、仲間と共に西郷軍に参加。九州各地を転戦したが、やがて官軍に降伏。宮崎で投獄された。その後、病を得て自宅療養を許され、熊本・砂取の実家に戻ったのである。

戦いの主戦場となった熊本城下は当時、惨憺たる有様だった。一面に焼野原が広がり、多くの人々はその日暮らしの生活を送っていた。公立の学校はあつたものの、入学できる者はわずか。青年達のほとんどは読む本も教師もなく、ぶらぶらと毎日を過ごしていた。この故郷の荒廃を目の当たりにして、彼には新たな考えが湧きおこった。つまり、有用な人物を育てることが、国家を変革させる近道ではないか、と考えるようになったのである。



同心学舎(県立済々黌高内)

こうして明治十二年十一月、佐々は同志らと共に私学「同心学舎」を設立した。生徒数二十数名という細々とした出発である。しかし、佐々の熱心な指導が評判を集め、やがて明治十五年二月、「私立済々黌」へと発展していく。

佐々は当時の学校教育を「融通のきかぬ器械のような人間こそつくれ、本当に人間らしい人間を育てていない」と厳しく批判した。そして、知識をため込むだけでなく、健やかな心と体を育てる教育を目指した。毎月、数十キロも離れた地に遠足を行い、夏は遊泳、冬にはウサギ狩りを教科に加えた。また、えり巻き、日傘、手袋の着用を禁止するなど、その教育法は、徹底した質実剛健の思想で貫かれていた。「本校は知識を授けるのが目的ではない。知識を活用する力を育てることに主眼を置いているのだ。」佐々は生徒達を前にいつもそう語ったという。

## 熊本精神の体現者

済々黌が誕生し成長を続けた明治十年代。それは維新以来の政府の近代化政策により、社会に様々な歪みが現われた時代だった。「西洋に追い付き追い越せ」を合言葉に、西洋の知識や技術のみを模倣し、日本古来の思想や学問を軽視する風潮が生まれていた。こうした時代にあつて、佐々は徳・体・智のバランスのとれた人間性豊かな教育を提唱し、実践したのである。彼の思想の根底にあつたのは、菊池一族や加藤清正の昔から熊本の地に脈々と流れている簡易・善良・素朴を愛する心。つまり、ラフカディオ・ハーンが『熊本精神』と名付けた、独自の精神文化にほかならなかつたのである。

極端な西洋思想の導入により、進むべき方向を見失ないかけていた明治中期の教育界。その低迷状態に爽やかな

新風を送りこんだものこそ、佐々友房の『熊本精神』だったのである。

- 参考文献  
『千子線百年／熊本日日新聞社編』  
『済々黌百年史／済々黌百年史編集委員会』  
『熊本スピリッツを考える／熊本スピリッツ運動推進協議会』